

〈指揮棒を振りたい!〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

今月は、どうしても指揮者になりた
いという夢を諦めず、キャリアも富も
コネもないままに、ついに自力で道を
切り拓いたパイオニア、アントニア・ブ
リコ(一九〇二—一九八九)の物語。

一九二六年、ニューヨークのある
コンサートホール。会場の案内係ウイ
リー(ブラーン)が、演奏が始まる直
前、客席の通路の最前列に椅子を運ん
できて座り、楽譜を広げて指揮者の一
挙手一投足を食い入るように見始めた。
このとんでもない行為を二階のバルコ
ニー席で見ているのがホールの持ち主
の御曹司フランク(ウエインライト)。
次の幕間に自らウィリーをつまみ出し、
即刻クビを言い渡す。

ウィリーは幼い頃に両親(養父母)
とともにオランダから移住してきた。
厳しい母親が「爪を噛む癖を矯正する
ため」に習わせたピアノのレッスンを
きっかけに指揮者になる夢を抱く。だ

が、どうすれば指揮者になれるのか、何
の知識もない。ホールでの「暴挙」も、
著名な指揮者の振り方を間近に見たい
一途な思いからだった。

メゲないウィリーは、今度は無料コ
ンサートの指揮者に直談判してレッス
ンを受ける許可を得る。授業料はナイ
トクラブのピアノ弾きのアルバイト。
口やかましい母には内緒だ。

ある夜、先生のお供で行った音楽家
の集まる夕食会で、「指揮者志望」の夢
を口にすると、周り中に失笑が広がっ
た。とりわけ、「女性の指揮者なんて、
ありえないわ」と声高に批判するのは、
セレブな女性たち。実はその邸宅はフ
ランクの実家で、彼だけはじつとウイ
リーの話を耳を傾ける。

ふたりは恋人同士になるが、結婚は
彼女にとり玉の輿ではなく、音楽を捨
てることを意味していた。ウィリーは
悩んだ末ひとり欧州に渡り、名前を

本名のアントニア・ブリコに戻し、ベル
リンの音楽アカデミー指揮科に初の女
性として入学、猛特訓を受ける。何が
あっても、「指揮棒、ファースト!」のア
ントニアだった。

一九三〇年、ついに念願かなってベ
ルリン・フィルの指揮者デビューを果
たす。アメリカに戻ったアントニアは、
一九三八年、女性として初めてニュ
ーヨーク・フィルを指揮し一万五千人
(!)の大観衆を熱狂させた。そして
ニューヨークで女性だけの交響楽団を
創設、後に男性も交えたセミプロ・シン
フォニーで、一九八四年に引退するま
で音楽監督を務めた。

アントニアが夢を追ってがむしゃら
に切り拓いた女性指揮者への道。後に
続く女性たちは増えた。日本にも、仏
ザンソン国際指揮者コンクールで女性
として世界初の優勝者、松尾葉子がい
る。だが、世界で最も著名な指揮者上
位二〇に女性はまだ入っていない。「女性
自ら何とかしなければ、今後が変わら
ない」とベートルズ監督は言う。

全編に二〇数曲のクラシックの名曲
が流れ、実在の演奏家や交響楽団につ
いてのエピソードも興味深い。だが、何
より胸を打つのは、苦境にあっても夢
を諦めないアントニアの情熱だ。

『レディ・マエストロ』

オランダ映画(139分)

監督:マリア・ベートルス

出演:クリスタン・デ・ブラーン、ベンジャミン・ウエイ
ンライト、スコット・ターナー・スコフィールドほか

9月20日より、Bunkamura ル・シネマほか全国順次公開

